

佳作

比例する二つのこと

湯沢市立皆瀬中学校

三年 兼子 愛加

毎週月曜日と金曜日の朝の始まりを、私は他の日とは違うんだか特別なことのように感じる。というのも、毎週月曜日と金曜日の朝は、本校の生徒会執行部が玄関に立ち学校中にあいさつを響かせてくれるのだ。私はそれを本当に良い活動だと思っている。

でも、ふと考えた時、私はその人たちに対して元気にあいさつをしているのだろうかという疑問が浮かぶ。自分は気持ちの良い朝を迎えられても、生徒会執行部のみんなは果たして良い気持ちなのだろうか。たぶん、気持ち良い訳ではないと思う。なぜなら自分の返すあいさつの声が生徒会執行部のみんなと比べたら、あまりにも小さいということに気付いたからだ。そして、自分が生徒会執行部の立場だったらと考えるとなおさら気持ち分かる。集団にいる時は、とても

大きな声であいさつをすることが出来る。でも、いざ一人で相手に向かってあいさつをするということになると、どうしても集団であいさつをするときの半分の声しか出せなくなってしまう。本当はできるのにやらないということが一番悪いことだというのは分かっている。だから、いきなりはできなくても、少しずつ積み重ねていけば、人を気持ち良くさせるあいさつができるのではないかと考えている。ただ考えているだけでは何も変わらないので私はこのことを二学期から実際にやっている。このことは私が実際に体験し、感じただけであいさつで人の気持ちを変えられるということだ。だから、私はあいさつには二つの力があると考えてる。

一つ目は、人の気持ちを良くも悪くもするということだ。気持ちの込もった大きな声のあいさつをすれば人の気持ちを良くすることが出来る。でもその反対の行為を行った場合、その人の一日をなんだかつまらないものにさせてしまう。あいさつにこんな大きな力があるということは私も深く考える前は、分からなかつ

た。

二つ目は、自分の力の有無を表す力があるということだ。私が思うに、あいさつが良くできる人というのは大会などでも好成績を残す。逆に言うと、大会で好成績を残す人はあいさつが良いということだ。この二つが比例しているということが分かったとき、私は実力よりも普段どう生活しているかということが勝敗を決めるのだと思った。とすると自分が大会に出て好成績を残すことができなかつた訳が見えてくるような気がする。だから、あいさつが良くできる人というのは、人生でも得をする人なのではないかと思う。まったく技術はないがあいさつは誰よりもできるといふ人が大会で優勝できるかといったら、少し違うような気がするが、本当に大切なことは、勉強ができる、ピアノが弾ける、スポーツができるということではないということをお願いしたいのだ。普通のことを当たり前前に行うことができる、そんな人になりたいと思っている。

あいさつについてこんなに深く考えたのは初めて

だ。そして二つの力があることを発見する良い機会だった。秋田県は学力日本一の県だということが学力検査によって証明されている。でも、本当に大切なのはそこなのだろうか。もし、あいさつ検査というものが実施されたとしたら、秋田県が上位に入るとは思えない。やれないというのではなくやらないのだ。そんなことが当たり前に行えるようになったら、どんなに明るい県になるだろうか。そして、それが他県の人まで届くようになったらもう秋田に求めるものはない。